

巻頭言

先人の足跡に思う

佐伯史談会評議員

佐 脇 貫 一

『西南地域史研究・第一輯』に、九州大学の秀村選三教授が、創刊の辞のなかで

「戦前、各地において郷土史が盛んで、その強い郷土意識には学ぶべき多くのものがあつたが、時には余りにも心情的であり、偏狭の感もないではなかつた。戦後そうした郷土史から脱皮するため、中央の研究者を中心に、地方史の研究が提唱され、多くのすぐれた研究が生れたが、かつての郷土史がもつた鋭い郷土意識を喪い（略）折角、地域独自の歴史事実につかりながら、中央の研究成果に眩惑されて、地域と中央との歴史の論理の矛盾を圧殺して、中央の研究に追従してしまう傾向さえ生れた……」

と述べている。教授のいう地域史と私たちの郷土史では、内容も考え方も比較出来ないぐらい違うので、教授の記

述しているようだとはいえないが、それでも専門の分野で、独自の研究を進めている人もあつて、こうした事実があることは肯づける。

しかし、佐伯史談会の場合は学究的な歴史研究が主ではなく、この土地に生れ、この土地に育つた者が、先人から継承した郷土の歴史文化を発掘し、それを明瞭にして後世に残そうとするもので、いわゆる温故知新の意義をもつ集りである。従つて機関誌『佐伯史談』が示すように、あくまで郷土を中心にした歴史を考究し、平易にこれを叙述して、現実の佐伯文化の育成に資しようとしているのである。

もっとも、佐伯史談会は郷土史の研究団体として、戦後に発会した末流的存在で、その点では県下の郷土史研究の草分けといわれた故佐藤蔵太郎翁（鶴谷外史）を生

んだ土地らしくない。

鶴谷翁は明治十四年に新聞界に入り、以来二十余年斯界にあったが、明治三十五年、大分の寓居で雑誌『豊国史談』を主宰、著述業に転じた。この『豊国史談』はわずか五号で廃刊されたが、それには矢野龍溪先生も筆を執り郷土史研究に専心する鶴谷を応援した。

鶴谷翁が佐伯に帰って来たのは大正元年十月で、佐伯町下中島（佐伯市城東区）の生家に『豊国史談会』の標札を掲げて、郡志・町村史などの編纂をした。

明治から大正・昭和にかけて、翁が編著した史篇の主なものには、豊後史蹟考・豊国小志・大分県町村沿革誌・別府町史・宇佐神宮記・佐伯案内記・佐伯志・宇目郷史・臼杵町史・佐伯秘説録・註釈豊後図田帳・佐伯先哲小伝・姫島史・南海部郡史（稿本）・新佐伯・豊豫関係史（稿本）・佐伯藩士禁錮騒動之顛末記（同）などがある。晩年の翁は病床にある日が多かったようだが、米寿に近い高齢で昭和十七年二月、永眠された。

国破れて山河あり。敗戦の傷手から立直って、ようやく人心地を取戻した佐伯人の郷土意識はしだいに復活した。郷土史研究が注目されるようになったのはそのため

で、いわば戦後における郷土の見直しであった。こうした動きのトップを切ったのは故増村隆也氏（医学博士）で、戦前からこつこつと収集していた史料を研究し、昭和二十五年、その成果を『佐伯郷土史』上下二巻にまとめあげた。また二十三年には増村訳の史料『鶴藩略史』上巻を謄写印刷している。（佐伯史談会の名称はこの当時、増村氏が主宰した集會に初めて使った。）

さて秀村教授は戦前の郷土史研究を「強い郷土意識には学ぶべきものがあつたが、時には余りにも心情的であり、偏狭の感もしないではなかつた。」と評しているが、ちょうどそうした状態は、戦後盛んになつた私たちの郷土史研究にいえるのではなからうか。私たちは素人で未熟、従つて研究の在り方は偏狭で、心情的でもある。その多くは趣味として郷土資料を漁り、たがいに知識を交換し合っているにすぎない。

この佐伯史談会は発足して二十有余年、郷土佐伯有数の文化団体として発展し、機関誌『佐伯史談』は普遍的な郷土史誌として、数百の会員に支持されている。たとえ素人臭く、心情的偏狭であろうとも、それでよいではないか。要は郷土意識高揚を任としているのだから。